

第二章 明石の君の物語 明石での新生活の物語

[第一段 明石入道の浜の館]

浜のさま、げにいと心ことなり(明石の浜の様子は、確かに良清が言うようにとても長閑で心行くものでした)。人しげう見ゆるのみなむ(ただ人が多く居るように見える事が)、御願ひに背きける(須磨に比べて隠棲には相応しくありませんでした)。

入道の領占めたる(りゃうじめたる、所領する)所々(多くの土地に)、海のつらにも山隠れにも(海辺にも山の中にも)、時々につけて(季節の折々の)、興をさかすべき渚の苫屋(宴席になりそうな渚亭)、行なひをして(修行して)後世のことを思ひ澄ましつべき(瞑想する為の)山水のつらに(山川のほとりに)、いかめしき堂を建てて三昧を行なひ(厳かな講堂を立てて念仏三昧を行い)、この世のまうけに(生活の糧に)、秋の田の実を刈り収め(頼みの田の実を収穫し)、残りの齡積むべき稲の倉町どもなど(老後に備えて蓄えた幾つもの倉などもあって)、折々、所につけたる見どころありてし集めたり(其々が土地柄に即した見応え在るものばかりでした)。

高潮に怖ちて、このころ(今は)、娘などは岡辺(をかべ、高台)の宿に移して住ませければ、この浜の館に(たちに、家で)心やすくおはします(源氏一行は気楽に過ごせそうです)。舟より御車にたてまつり移るほど(源氏が舟から御車に乗り移りなされる頃に)、日やうやうさし上がりて(漸く日が高く昇って)、ほのかに見たてまつるより(入道は源氏をちらっと拝し奉っただけで)、老忘れ(おいわすれ、其の艶やかさに年も忘れ)、齡延ぶる心地して、笑みさかえて(笑みを光らせて)、まづ住吉の神を、かつがつ拝みたてまつる(何は然て置き拝み奉ります)。月日の光を手を得たてまつりたる心地して、いとなみ仕うまつること(入道が喜んで進んで源氏のお世話をするの)、ことわりなり(尤もな事でした)。

所のさまをば(元々の風景の良さに付いては)さらにも言はず(改めて言うまでも無いが)、作りなしたる心ばへ(浜の館の作り込んだ庭の趣向は)、木立、立石(木立や石の配置)、前栽などのありさま(植え込みの花々)、えも言はぬ入江の水など(絶妙な水の取り込みなど)、絵に描かば、心のいたり少なからむ(修行の足りない)絵師は描き及ぶまじと見ゆ(絵師には描き切れないだろうと思われました)。

月ごろの御住まひよりは(数ヶ月暮らした須磨の住まいよりは)、こよなくあきらかに(格段に明るくて)、なつかしき(快適でした)。御しつらひなど(源氏のために用意された部屋の作り付けなども)、えならずして(立派なもので)、住まひけるさまなど(入道の暮らしよりは)、げに(確かに良清の話通りに)都のやむごとなき所々に異ならず(都の貴族の家々と変わらず)、艶にまばゆきさまは(洗練された派手な様子は)、まさりざまにぞ見ゆる(其以上にも見えました)。

[第二段 京への手紙]

すこし御心静まりては(明石の浜の館に着いて少し気を落ち着け為さると)、京の御文ども聞こえたまふ(源氏は京への手紙の数々を遣わし為さいます)。参れりし使ひは、今は(二条院から来

ていた文使いが今でも)、「いみじき道に出で立ちて悲しき目を見る(ひどい嵐の悪路となって大変な目に遭った)」と泣き沈みて、あの須磨に留まりたるを召して、身にあまれる物ども多くたまひて遣はす(過分な褒美をお与えになって京への使いに出しました)。

むつまじき御祈りの師ども(信頼できる僧に祈祷の依頼をし)、*さるべき所々には(移転を伝えるべき幾つかの所には)、このほどの御ありさま(上巳の祀り以来の顛末を)、詳しく言ひつかはずべし(詳しく知らせなければ為らないでしょう)。 *注に<「御祈りの師ども」は源氏の祈祷の師たち。「さるべき所々」とは、『集成』は「そのほか関係の深い陰陽師、呪禁師などの類いであろう。改めて祈祷その他を依頼するためである」と解し、『完訳』は「親族・友人・妻妾など」と解す。>とある。確かに分かり難い。短文過ぎる。しかし他所に縁者についての記述が無いので、此処で其等が述べられたと見ておく。

*入道の宮ばかりには(なかでも特に入道の宮だけには)、めづらかにてよみがへるさまなど聞こえたまふ(奇跡的に生まれ変わった様子などをお伝えなさいます)。 *入道の宮は源氏にとって永遠の理想像という特別な存在なので之うした手紙を送った、のでは先ずあるまい。幼い日の憧れは源氏自身の脳内物質を溢れさせ、特別な思考回路を形作ったかもしれない。そして最早それは憧れの対象自体を離れて、源氏の人生に固定されたかもしれない。だから永遠である。しかしそれは同時に対象の変化、内面および外面および関係性の全ての変化、すら無視するもので、いつまでも対象本人に連絡を取る事とは別の問題である。要するに此処での手紙は、春宮の出生についての二人の自責と、後見についての実務上の見通し、についての懸念の払拭が伝えられたと見るべきだろう。とはいえ中宮は既に出家して宮内内の地位を辞退することで、権利も義務も放棄している。要するに、大後の権勢に対して邪魔立てはしないから東宮を庇護してください、という姿勢の表明である。後は毎日の修行で内面を律するのみだが、是は秘儀なので表向きは関係ない。また、東宮の後見については元々宮筋に有力者がいないので、源氏延いては左大臣家が頼りだったが、敢え無く右大臣家に実権は取られた。今上帝は故院の意向を尊重して王家血筋の春宮を次帝にと考えているが、大后にとって王家血筋などは利用価値がある方便に過ぎない。故院の男根を啜え込み、今上帝を孕んだ女にとって、貴賤も糞味噌も自分の生理で片付く話である。一生涯取り澄まして生きていられる前提で、王家血筋を担ぎ上げているが、正味の所は茶番である。学問や格式なども男が管理技術として知恵を絞ったもので、女は其の中から使えるものを使っているだけだ。春宮の差し替えなど自分の旨一つで如何にでも成ると思っているし、今の権勢のままなら事実そうである。方や源氏だが、俄かに近付いた明石入道は此処まででは「都のやむごとなき所々に異ならず艶にまばゆきさまは優りさまにぞ見ゆる」という大雑把な記述だが、其の財力は相当なものようだ。いわゆる受領の台頭なのだろうが、当時の人々にとってこうした記述は新興成金の出世物語に見えたのか、時代の隆盛を思わせたのか、興味深い。其の時代の趨勢を嗅ぎ取って中央官僚の地位を捨てて播磨国の受領に志願した明石入道は、源氏の実母の従兄妹なのである。メロドラマは結構実話である。明石入道が住吉神を信奉しているという設定も既に激動を予感させる。その明石と源氏が繋がった。源氏は入道の財力が春宮の後見に寄与するであろう可能性くらいは入道宮に仄めかしたかも知れない。そして何と言っても源氏と入道宮との二人の懸念と言え、過ちが赦されるのか、という事である。是には内面と外面がある。外面は春宮の即位であって、是は未だ果たされていない、が芽も摘まれてもいない。内面は気の持ちようだが、其の気に成る為には、何らかの客観的な事象の変化が必要となる。それが須磨の嵐だった、らしい。「めづらかにてよみがへる」は<辛うじて生き延びた>のではなく<滅多に無いことだが黄泉還った>のである。ただの天変地異などではなく、故院の御尽力の賜物とでもいふべきか、海竜王や雨神や風人や雷神その他の八百万の神に赦されて、自分の再起が<客観的に>承認されたと思う、とでも源氏は言っているのだろう。随分理屈っぽいノートだが、是は私が理屈っぽいのではなく、作者が理屈っぽい書き方をしているからに他ならない。

二条院のあはれなりしほどの御返りは(二条院の心の込もったお手紙へのお返事は)、書きもやりたまはず(なかなか筆が進まず)、うち置きうち置き(休み休み)、おしのごひつつ(涙を拭いながら)聞こえたまふ御けしき(お書きに為る源氏の御姿は)、なほことなり(また格別でした)。

「返す返すいみじき目の(繰り返し酷い目を)限りを尽くし果てつるありさまなれば(全て被り切った状態なので)、今はと(今こそはと)世を思ひ離るる心のみまさはべれど(出家しようとはばかり考えていましたが)、『*鏡を見ても(鏡の御姿を偲んで)』とのたまひし(と仰った貴方の)面影の離るる世なきを(面影が忘れられないので)、かくおぼつかなながらやと(このように会えないままでいる辛さを思えば)、ここら悲しきさまさまの憂れはしきは(他の悲しい出来事の憂いは)、さしおかれて(大した事では無く)、 *注に<紫の上が詠んだ「別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし」(須磨、第一章三段)という和歌をさす。>とある。源氏が鏡を見ていた姿を後ろから見ていた二条院が、鏡に映った源氏の姿を其処に止めたいと思ったものだが、鏡に映った姿は単に光学的に反射した平面像というだけでなく、頭脳が存在し無い形状としての独立物性を視認させる。切り取った姿、という表現そのものの感覚をヒトは感じるものだと思う。だから実像を見る時と違って、鏡の像を見る時は、その姿は見る者の物に成ってしまう。それが面白い事に絵や写真は何処までも作家の物だ。在るが儘で済まさないのが人間の浅ましき、かもしれない。

遙かにも思ひやるかな、知らざりし浦より彼方(をち)に浦伝ひして (和歌 13-03)

いつでも思う好きな人、ますます遠く離れても (意識 13-03)

夢のうちなる心地のみして(この数日来の出来事は夢のようで)、覚め果てぬほど(まだ覚めな気分なので)、いかにひがこと多からむ(かなり変な事を多く書いたかもしれせん)」

と、げに、そこはかたなく(と実に心許無さそうに)書き乱りたまへるしもぞ(書き乱して御出での源氏の姿たるや)、いと見まほしき側目なるを(傍目にもとても麗しく)、

「いとこよなき御心ざしのほど(何という思い遣りの深さだろう)」と、人びと見たてまつる(供人たちは思い申し上げます)。おのおの(彼等も其々)、故郷に心細げなる言伝てすべかめり(故郷に先行きの見通しが立たない現状の報告を使いに託したことでしょう)。

を止みなかりし(少しも止むことが無かった)空のけしき(雨模様が)、名残なく澄みわたりて(すっかり晴れ上がって)、漁する海人ども(あさりするあまども)誇らしげなり(やっと出番が回って活気付きました)。須磨はいと心細く(須磨はとても寂れて)、海人の岩屋もまれなりしを(漁師の家も少なかったが)、人繁き厭ひは(ひとしげきいとひは、人の多い喧しきは)したまひしかど(あるものの)、ここはまた、さまことにあはれなること多くて(違う面で趣の有る事が多くて)、よろづに思し慰まる(何かと思ひ紛らしなさいます)。

[第三段 明石の入道とその娘]

明石の入道、行なひ勤めたるさま(念仏修行に励む姿は)、いみじう思ひ澄ましたるを(すっかり悟り切っていたが)、ただこの娘一人をもてわづらひたるけしき(ただ娘の将来に気を揉む様子

は)、いとかたはらいたきまで(もう見苦しいほどで)、時々漏らし愁へきこゆ(源氏にも時々打ち明けて相談申します)。

御心地にも(源氏にしても)、をかしと聞きおきたまひし人なれば(良清から美人だと聞き及んで居らした人なので)、「かくおぼえなくてめぐりおはしたるも(このように意外な形で回り逢うと言うのも)、さるべき契りあるにや(前世の縁が在るからだろうか)」と思しながら(と御思いに為りながら)、

「なほ(とはいえ)、かう身を沈めたるほどは(謹慎の身である内は)、行なひより他のことは思はじ(修行以外の事は考えないことにしよう)。都の人も(二条院にも)、ただなるよりは(普段の時以上に)、言ひしに違ふと思さむも(言っている事と違ふと御思いに為りそうで)、心恥づかしう(気後れする)」思さるれば(思いで居らしたので)、けしきだちたまふことなし(気乗りする素振りをお見せに為りません)。

ことに触れて(しかし符と)、「心ばせ(気立て)、ありさま(容姿)、なべてならずもありけるかな(並では無いという事だしな)」と、ゆかしう思されぬにしもあらず(気をお持ちに為らぬ訳でもなかったのです)。

ここにはかしこまりて(入道は源氏の居間には遠慮して)、みづからもをさをさ参らず(自分でも気楽に参る事は無く)、もの隔たりたる下の屋にさぶらふ(少し離れた下屋に控えていました)。さるは(しかしそうは言っても内心では)、明け暮れ見たてまつらまほしう(明け暮れにお会いして御話し申し上げたい気持ちを)、飽かず思ひきこえて(飽き足らず思い申して)、「思ふ心を叶へむ(婚儀が整いますよう)」と、仏、神をいよいよ念じたてまつる。

年は六十ばかりになりたれど、いときよげに(とても身奇麗にしている)あらまほしう、行なひさらぼひて(いかにも修行瘦せして)、人のほどのあてはかなればにやあらむ(家柄が高貴だったからだろうか)、うちひがみほればれしきことはあれど(頑固で老いぼれてはいても)、いにしへのことをも知りて(故事に明るく)、ものきたなからず(品があって)、よしづきたることも交れば(教養の高さも見受けられたので)、昔物語などせさせて聞きたまふに(源氏が入道に昔話をさせ為されて御聞きになると)、すこしつれづれの紛れなり(幾らか退屈も紛れました)。

年ごろ、公私御暇なくて(おほやけわたくしおんいとまなくて)、さしも聞き置きたまはぬ(源氏は入道の話から然程は聞き及んでいらっしゃらなかった)世の古事どもくづし出でて(世の中の故事来歴が少しづつ明らかにされて)、「かかる所をも人をも、見ざらましかば(知らなかったら)、さうざうしくや(物足りなかったら)」とまで、興ありと思すことも交る(面白いと御思いになることもありました)。

かうは馴れきこゆれど(このように親しく御話し申し上げる入道だったが)、いと気高う心恥づかしき御ありさまに(源氏のそれは気高く気後れしてしまう御姿を前にすると)、さこそ言ひしか(そうは言っても)、つつましうなりて(遠慮があって)、わが思ふことは(真意の婚儀の件は)心のままにもえうち出できこえぬを(思うようにはとても申し出しかねているのを)、「心もとなう、

口惜し(なかなか切り出せなくて、歯がゆい)」と、母君と言ひ合はせて嘆く(母君と話し合っては嘆いていました)。

正身は(さうじみは、生娘の姫本人は)、「おしなべての人だに(そこそこの身分の人でさえ)、めやすきは見えぬ世界に(そうは居ないこの田舎に)、世にはかかる人もおはしけり(世の中にはこれほどの人が居たのか)」と見たてまつりしにつけて(と拝見申し上げてからは)、身のほど知られて(身の程を思い知らされて)、いと遙かにぞ思ひきこえける(いっそ遠い存在に思い申し上げます)。親たちのかく思ひあつかふを聞くにも(両親が婚儀を考えて居る事を聞いても)、「似げなきことかな(とても自分では釣合わない)」と思ふに(とと思いながら)、ただなるよりはものあはれなり(話だけの時より胸が時めきました)。

[第四段 夏四月となる]

四月になりぬ。更衣の御装束(ころもがへのおんしゃうぞく)、御帳の帷子(みちやうのかたびら)など、よしあるさまにし出でつつ(夏用の風情ある物に替えては)、よろづに仕うまつりいとなむを(何かと世話焼きに勤しむ入道を源氏は)、「いとほしう、すずろなり(煩くて、落ち着かない)」と思せど(と御思いに為ったが)、人ざまのあくまで思ひ上がりたるさまの(物腰があくまで礼を尽くそうとの)あてなるに、思し(厚意と御思いに為って)ゆるして見たまふ(受け入れて御出ででした)。

京よりも、うちしきりたる(頻りに)御とぶらひども(御見舞いの数々が)、たゆみなく多かり(次々と届きました)。のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも(海の景色を雲も無く見晴らしなさると)、住み馴れたまひし(符と其れを住み慣れなさった)故郷の池水(ふるさとのいけみづ、二条院の遣り水かと)、思ひまがへられたまふに(見間違いなさっては)、言はむかたなく恋しきこと(言い様の無い恋しさが)、何方となく行方なき心地したまひて(宛ても無くさまよう気がして)、ただ目の前に見やらるるは(我に返れば目の前に見えるのは)、淡路島なりけり(淡路島なのでした)。

「*あはと、遙かに」などのたまひて(などと古歌を口ずさみなさって)、 *注に<「淡路にてあはと遙かに見し月の近き今宵は所からかも」(新古今集雑上、一五一五、凡河内躬恒)による。>とある。凡河内躬恒(おほしかふちのみつね)は紀貫之と並び称される歌人で、実際に貫之とも親交が深く、また政務では淡路の実務管理官として赴任した事があるらしい。この歌は「新古今和歌集の部屋」他のWebサイトを参照した所、躬恒が宮中で月詠みで作ったものらしく<淡路では何とも遠くに見た月が今夜は雲上にいる所為か近く見える>という意味を「あはちにてあはとはるかにみしつきの、ちかきこよひはところからかも」という音に乗せた妙味らしい。ただ元々、「月～雲上～御所」の連想があるので「月の近き所から」という言い方は、意味としては重複気味だが、華やいだ遊び歌の雰囲気は良く伝わる。とはいえ「注」に<宮中で月詠みの歌>と記されていないので、「所から」が<宮中＝雲上>を指すとは分からず、私には今歌は一見では意味不明だった。

「あはと見る淡路の島のあはれさへ、残るくまなく澄める夜の月」(和歌 13-04)

「あはれ淡路をあはと見て、澄んだ夜空は満々月」(意訳 13-04)

*さすがに引歌を前振りしただけに、さらに「あはれ」を畳み掛けてきた。しかし本当のさすがは、冗談めかして「月＝御所」を詠み上げながら、「残るくまなく＝晴れて」「澄める＝住める＝返り咲く」機会を「夜の＝虎視眈々と」此の明石の地で「あはれさへ＝こんな自分でも」「あはとみる＝間合いを見る＝窺う」気概を歌い上げている事だろう。源氏といい、明石入道といい恐れ入る権力志向である。按察使大納言家の血筋だろうか。

久しう手触れたまはぬ(暫くお弾きに為らなかった)琴を(きんを、七弦を)、袋より取り出でたまひて、はかなくかき鳴らしたまへる御さまを(軽く弱い音で御弾きに為る源氏の御姿を)、見たてまつる人もやすからず(押し申し上げる供人も感動して)、あはれに悲しう思ひあへり(各自自分なりに悲しみを思い合いました)。

「*広陵(かうれう)」といふ手を(という曲を)、ある限り(丹念に)弾きすましたまへるに(源氏が心を込めてお弾きになると)、かの岡辺の家も(姫が住む高台の家でも)、松の響き(松風の音や)波の音に合ひて、心ばせある若人は(管絃の素養がある若い女房たちは)身にしみて思ふべかめり(しみじみと聞き入った事でしょう)。何とも聞きわくまじき(何の音かも聞き分けられない)このもかのもの(此处彼処の)咳ふる人どもも(しはふるひとどもも、しわがれ声の賤しい者どもも)、すずろはしくて(音に誘われてそわそわと外に出てきては)、*浜風をひきありく(浜風に当たって風邪を引いて歩く有様です)。*「広陵」は中国の古代十大名曲の一つ「廣陵散」という曲、との事。ところでこの曲には、三国時代から晋を興した司馬昭に処刑された竹林の七賢の一人だった嵇康(けいこう)が、誰にも教えずに墓場まで持ち去った名曲、という逸話がある。でもこの逸話は矛盾している。記録媒体もマスメディアも覚束ない三国時代に広く名曲と知られるには、実際に多くの人が演じ多くの人が見聞きした上で其形の評価されなければ「名曲」とは認識されない。此处での「名曲」は例によって古い歴史書の常套手段である処の、由緒があるから名曲なのだ、という故事を修辭的に使う言い方なのだろう。絶世の美女と同じ手法だ。要するに、ある曲や女についての一定の評価が既に在って、其処に大事件が重なった時に、その固有体と固有事態の双方の印象を深める為に作された伝聞、なのだろう。で、案の定というか、幸いにも「廣陵散(ぐわんりんさん)」の古琴演奏はYouTubeで現在いくつかが見聞き出来る。ただしこの現在に伝わる「廣陵散」が「嵇康の廣陵散」と同じ曲では無いのかもしれない。が、同じ曲なのかもしれない。それでも奏法までは正しく伝わっていないだろうから、全く同じとは考えられない。というか、現在のいくつかの演奏も奏者の解釈で一人づつ異なる。それに動画を見た限りでは、この曲は調弦と主題こそは在りそうだが、聞かせ所は古琴の響き其の物の様な、楽器についての演者の理解と技量に大きく左右されるという器の大きさで、ある意味で最も古く最も新しい曲、とも思える。というのも、古琴すなわち七弦は形態は置き弾きだが、琴柱で音階を揃える箏では無く、指盤で音程を取る琵琶系の楽器なので個人技の余地が大きい。それだけに現代の演奏は、物語で語られる源氏の七弦演奏を思い描く時に、必ずや何某かの手掛かりに頼れそうな気がする。有難い事と信じたい。尤も、そもそも源氏が弾いた「かうれう」という曲は「広陵(くわうりやう)」では無い、という説もあるそうなので、信心も程々だが。*「浜風をひきありく」については<「浜風」は「風」と「風邪」の掛詞、言葉遊び。>と注にある。

[第五段 源氏、入道と琴を合奏]

入道もえ堪へで(たへで、逸る気を抑えきれず)、供養法たゆみて(先人尊崇の読経を中断して)、急ぎ参れり(源氏の演奏に馳せ参りました)。

「さらに(今さらに)、背きにし世の中も取り返し(出家して捨てた俗世を取り返して)思ひ出でぬべくはべり(思い出しそうになります)。後の世に願ひはべる所のありさまも(死後に参りたいと思っている極楽の有様かと)、思うたまへやらるる夜の、さまかな(思い申し遣られる今宵の演奏で御座います)」と泣く泣く、めできこゆ(と涙ながらにお褒め申します)。

わが御心にも(源氏自身も)、折々の御遊び(四季折々の音楽会で)、その人かの人(の)の琴笛、もしは声の出でしさまに(或いは歌い手と)、時々につけて(合奏した時に)、世にめでられたまひしありさま(皆から褒められた事や)、帝よりはじめたてまつりて(帝を初めに御申し上げて其の他の宮廷人たちも)、もてかしづきあがめたてまつりたまひしを(源氏を大事に敬い申し為されていた事を)、人の上もわが御身のありさまも思し出でられて(其の時々の相手や自分の様子まで思い出して)、夢の心地したまふままに(今では夢のような気持ちで御出でのままに)、かき鳴らしたまへる声も(お弾きに為る琴の音も)、心すごく聞こゆ(深い思いに聞こえます)。

古人は(ふるひとは、年老いた入道は)涙もとどめあへず(すっかり涙もろくなって)、岡辺に(高台の館に)、琵琶、箏の琴取りにやりて、入道(自分は)、琵琶の法師になりて、いとをかしう珍しき手(とても上手に珍しい曲を)一つ二つ弾きたり。

箏の御琴(さうのおんこと、十三弦を)参りたれば(入道が源氏にお勧め申すと)、少し弾きたまふも(源氏は少しお弾きに為ったが)、さまざまいみじうのみ(どれを取っても大した腕前だとばかり)思ひきこえたり(入道は思い申し上げました)。

いと(別に)、さしも聞こえぬ物の音だに(然したる事も無く立つ風切りなどの物音でさえ)、折からこそは(場合によっては)まさるものなるを(優れた風情となるものだが)、はるばると物のとどこほりなき海づらなるに(広々と何も無い海辺に)、なかなか(却って)、春秋の花、紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとなう茂れる蔭ども(ただ如何という事も無く茂った木陰の)、なまめかしきに(夏草の青々しさに)、*水鶏(くひな)のうちたたきたるは(が戸を叩くように鳴くのは)、「*誰が門さして(たがかどさして、誰に締め出されたのか)」と、あはれにおぼゆ(同情を誘います)。 *「くいな」の中で<詩歌にとりあげられ、鳴く声を「たたく」といわれるのは夏鳥のヒクイナのこと。(大辞泉)>とある。「緋水鶏(ひくいな)」は<クイナ科の鳥。全長23センチくらい。上面は緑褐色、顔から胸は赤褐色で、脚は赤い。日本には夏鳥として渡来し、水田や沼で繁殖。夜キョッキョッと鳴き、この声が古来「門をたたく」といわれた。なつくいな。《季夏》(大辞泉)>とある。 *「たがかどさして」については<「まだ宵に{まだ早い時に}うち来てたたく水鶏かな{遣って来て戸を叩く様に鳴くヒクイナだが}誰が門さして入れぬなるらむ{誰が鍵を掛けて締め出したのだらう}」(源氏積所引、出典未詳)。誰が門を鎖しての意。({は私訳。}>と注にある。出典未詳では調べ辛い、今でも通じる場面なら浮気がばれて締め出された男、といった所か。しかし源氏と入道の中央志向の文脈から考えれば、<ヒクイナ=源氏>を御所から追い出した太后および右大臣家勢力を、はっきり敵に見定めた事を示した表明に他ならない。いや彼等が敵なのは初めから知れているので、自らの宣戦布告である。是は源氏の再起を明石と言う土地が後押ししているという煽りの描写なのだろう。為時女は実に理屈っぽい。

音もいと二なう出づる琴どもを(音色もまた又と無く良く鳴る七弦と十三弦を)、いとなつかしう弾き鳴らしたるも(源氏は実に手慣れてお弾きに為ったが)、御心とまりて(興に乗って)、

「これは(十三弦は)、女のなつかしきさまにて(女が畏まらずに打ち解けて)しどけなう弾きたるこそ(のびのびと弾いてこそ)、をかしけれ(いい感じなのだが)」と、おほかたにのたまふを(大まかな話として仰ったのを)、入道はあいなくうち笑みて(入道は其れと無く頬笑んで)、

「あそばすより(殿がお弾きあそばす以上に)なつかしきさまなるは(手慣れた弾き手などは)、いづこのかはべらむ(何処にも居りますまい)。なにがし(不肖わたくしは)、延喜の御手(えんぎのみて、醍醐天皇の御代の正式な奏法)より弾き伝へたること(から伝授を引き継ぐこと)、四代に(しだいに、四代目に)なむなりはべりぬるを(当たる者ですが)、

かうつたなき身にて(このように下手でして)、この世のことは捨て忘れはべりぬるを(出家も致して居りますが)、物の切に訝せき(もののせちにいぶせき、悩みに行き詰った)折々は、かき鳴らしはべりしを(弾き紛らしておりましたが)、あやしう(如何いう訳か)、まねぶ者のはべるこそ(其れを見よう見まねで覚えた者が居りまして)、自然に(じねんに、いつしか)かの先大王の(せんだいわうの、昔の名手の)御手に通ひて侍れ(おんてにかよひてはべれ、弾き方に似て来ております)。

山伏のひが耳に(いや是は、わたくしが山伏の聞き違えで)、松風を聞きわたしはべるにやあらむ(松風のような粗野な音をそんな風に聞き取ってしまっているのかも知れません)。いかで(ぜひ)、これも忍びて(これも内々に)聞こしめさせてしがな(御聞き頂きたいものです)」と聞こゆるままに(とお話し申し上げる内に)、うちわななきて(ようやく娘の話を切り出せた事に感激して)、涙落とすべかめり(涙を落としそうでした)。「山伏の僻耳」という言い回しについては<娘の琴の上手を誉めた入道の謙遜の詞。「松風に耳慣れにける山伏は琴(きん)を琴(こと)とも思はざりけり」(花鳥余情所引、拾遺集歌人の寿玄法師の歌、出典未詳)。>と注にある。山で修行する僧は<金を事とも思わない=物質に頓着しない>で暮らす内に<琴を琴とも思わない=琴を弦楽器とは思わない=風流が分からない>ようになる、といった処だろうが、是が戒めいた皮肉なのか、皮肉めいた戒なのか、背景が分からないので掴み切れない。が、次の源氏の台詞がこの歌を下敷きにしているのです、この注釈は必脚だった。

君(すると源氏の君は)、「*琴を(私の七弦の演奏など)琴とも聞きたまふまじかりけるあたりに(とてもまともな弦楽器の演奏として御聞き頂ける様な評価を頂ける筈も無い名手が近くに御出でになる場所だというのに)、ねたきわざかな(出過ぎた真似をしました)」とて(と言って)、押しやりたまふに(手許の七弦を入道の方へ押し遣りなさって)、*注に<源氏の謙遜の詞。入道の踏まえた和歌を源氏も踏まえて応答。>とある。であれば此処での読みは「きんをこととも」でなければ洒落た会話が成立しない。とすれば、「琴を琴とも聞き給ふ=古琴の演奏を真面に御聞き下さる」という意味に、「琴を事とも聞き給ふ=演奏を取るに足る物とお思い下さる」を掛けている、事になる。そして其の複意が双方共に「まじかりける=(普通なら)成立し難い」「あたりに=先大王の御手が近くに御出での此処の場で」という、混み入った言い方に成らざるを得ない実に凝った語り口で、注釈の助けを借りても難解な一文だ。

「あやしう(不思議に)、昔より箏(さう、十三弦)は、女なむ弾き取るものなりける(女の方が習うものでした)。*嵯峨の御伝へにて(さがのおんつたへにて、嵯峨天皇の御指示で)、女五の宮(をんなごのみや、第五皇女が)、さる世の中の上手にもものしたまひけるを(時の名手にお成りだったが)、その御筋にて(おんすじにて、系譜に)、取り立てて伝ふる人なし(際立った名手は続い

ていません)。 *注に<嵯峨天皇の第五皇女繁子内親王。嵯峨天皇、繁子内親王が共に箏の琴に巧みであったということは、『秦箏相承血脈』には見えない。>とある。「伝ふる人なし」なので記録が無いのか、名人が実在しなかったのかは不明。拍子抜けの注釈にも思えるが、そんなに古い箏の伝承資料があること自体に驚く。嵯峨天皇は809年4月の即位とされ、醍醐天皇が右大臣菅原道真を正月に左遷して新組閣した後に延喜年号に改元した901年7月からは約100年前の、平安初期の事である。いずれにしても、こういう大袈裟な物の言い方をする時は、浮かれ気分での冗談の応酬なのだろう。

すべて、ただ今世に名を取れる人びと(今の名手と取沙汰されている人たちは)、掻き撫での(上辺を準る)心やりばかりにのみあるを(形だけの演奏ばかりで)、ここにかう(此処にこうして)弾きこめたまへりける(演奏に打ち込む人が居るとするのは)、いと興ありけることかな(とても興味深いことです)。いかでかは(ぜひとも)、聞くべき(聞いてみたいものです)」とのたまふ(と仰います)。

「聞こしめさむには(御聞き為されるのに)、何の憚りかはべらむ(何の遠慮が御座いましょう)。御前に召しても(御呼び立てなされば済む話です)。*商人(あきうど)の中にてだにこそ(の中にでさえ)、古琴(ふること)聞きはやす人は、はべりけれ(昔の曲や話を聞くのが好きな者は居るという事です)」。 *「商人」を持ち出す語り口については<白楽天の「琵琶行」を踏まえる。「ふること」は「古事」に「古琴」を連想させた表現。>と注にある。「琵琶行(びはかう)」は<中国、中唐の詩人白居易の七言古詩。816年、四五歳の作。船上で琵琶を弾く女の語る哀れな身の上話に、左遷された自分の境遇を重ね合わせて作った長編。「長恨歌」と並ぶ代表作。(大辞林)>とある。「行」は<旅行>と文章の<行間>に掛けた旅情の<歌>という事だろうか。かつて小林旭が「北帰行」を流行らせた事があった。「琵琶行」についてはさすがに有名な漢詩らしく多くの充実したWebサイトがあるようで、いくつかを参照させてもらったが、特に「碓豊長の詩詞」というサイトは解説が詳しい。ところで琵琶行の序文「琵琶行并序」に歌の背景説明が在るが、この序文在ってこそその名曲なのだろうと思わせる名司会ぶり、漢詩本体を味わう素養のない私でも、せめて概略でも書きたくなる序文だった。即ち、「元和(げんな)十年(815年)私(白居易)は田舎の厩馬管理官に左遷された。その翌年の秋に友人を船着場まで見送ることがあって舟中で琵琶を聴いた。その音が洗練されていたので弾き手の女に話を聞くと、その女は昔長安の芸者で名人に琵琶を習ったが年をとって身が立たず、商人と結婚して此処で暮らしていると言う。興に乗って何曲か弾かせては酒が進んだが、曲が終わると子供の頃の快活さに今の不遇の不甲斐なさを照らし思い憔悴とする。この女の話で自分の立場を自覚できたので、其の思いを612字余りの長歌にして、此処に琵琶行と命名する。」というものである。という事で「商人」は琵琶女の亭主の事だったが、入道は其の<常識>を持ち出すことで「琵琶行」を源氏と当時の上流読者に想起させて、続く娘の自慢話につなげたかった、という事が後で知れる。

*琵琶なむ(その琵琶というものは)、まことの音を弾きしづむる人(本当の音を弾きこなす人が)、いにしへも難うはべりしを(昔も少なかったのですが)、をさをさとどこほることなう(この真似事者は其れも滅多に間誤付く事無く)なつかしき手など(弾き熟しまして)、筋ことになむ(楽器に長けているようです)。 *唐突に見える琵琶の話題も先の注釈を踏まえれば繋がる。やはり<商人の古琴聞きはやす>事から「琵琶行」を連想するのは、当時の教養人の常識だったようで、こうした会話が無理なく成立する、という事らしい。尤も、いくら「琴(こと)」が琵琶を含む弦楽器の総称だとしても、「琴(きん、古琴、七弦)」と「箏(さう、十三弦)」と「琵琶(びは)」が別の楽器なのは明らかで、何の振りも無く話題転換は出来なかった、という事か。しかしこの<洒落た>語り口から、どうやら「古琴」と「琵琶」に指盤演奏という同系統の楽器という認識が在ったらしい事は、少し窺がえる気もする。

いかでたどるにかはべらむ(どのようにして習得したものなののでしょうか)。荒き波の聲に交るは(あれほどの腕前の者が海辺の僻地で埋もれているのは)、悲しくも思うたまへられながら(不憫にも思い申される所ですが)、*かき積むるもの嘆かしさ(積年の晴れぬ思いが)、紛るる折々もはべり(其の演奏で紛れる時なども御座います)」など好きみたれば(などと入道が音楽に造詣の深い所を見せていたので)、をかしと思して(源氏は興味をお持ちに為って)、箏の琴(さうのこと、箏の方を)取り替へて(古琴と取り替えて)賜はせたり(入道に差し向けて弾かせ為さいました)。*此処の言い回しは入道が精一杯に源氏の事情に訴えて、娘を売り込もうという工夫だろうか。

げに(入道は実に)、いとすぐしてかい弾きたり(とても優れた演奏をしました)。今の世に聞こえぬ(今では一般的で無い)筋弾きつけて(奏法を用いて)、手づかひいといたう唐めき(指づかひが実に何とも唐風で洒落ていて)、揺の音(ゆのね、左手で琴柱の先を揺らす音が)深う澄ましたり(見事に澄んでいました)。

「*伊勢の海」ならねど(当地は明石で伊勢では無いが、催馬楽の「伊勢の海」を)、「清き渚に貝や拾はむ」など、声よき人に歌はせて(歌の上手な供人に歌わせて)、我も時々(源氏自身もちよくちよく)拍子とりて(はうしとりて、合わせて)、声うち添へたまふを(伴唱為さるのを)、琴弾きさしつつ(入道は琴の手を止めて)、めできこゆ(お褒め申し上げます)。*注に<ここは明石の地、伊勢の海ではないが。次の「清き渚に」という語句をいうための枕。催馬楽「伊勢の海」の歌詞。「伊勢の海の清き渚に潮間に(しほかひに)名告藻や(なのりそや)摘まむ貝や拾はむや玉や拾はむや」。>とある。「潮間」は引き潮の間で、つまりは潮干狩り。「名告藻」は岩場の海藻ホンダワラの古名、歌名。「玉(たま)」は宝石だが、海辺なので真珠。「汚れていない浜辺で引き潮のうちに海藻や貝を採ろう」という言い方だが、普通に<処女との性戯>を感じさせる歌なので、此処の記述は祝言の前祝いとまでは行かなくても、娘の話題を源氏が好感したと言う心象描写に他ならない。

御くだものなど(餅菓子や木の実など)、めづらしきさまにて参らせ(盛沢山に用意して)、人びとに酒(供人に酒を)強ひそし(しひそし、無理強い)などして、おのづから(いつしか)もの忘れしぬべき夜のさまなり(旅の憂いも忘れてしまいそうな夜となりました)。

[第六段 入道の問わず語り]

いたく更けゆくままに、浜風涼しうて、*月も入り方になるままに、澄みまさり(ますます大きく光って)、静かなるほどに(供人も酔って寝静まった頃に)、御物語残りなく聞こえて(入道が源氏の身の上話を御話し申して)、この浦に住みはじめしほどの心遣ひ(こころづかひ、気苦労)、後の世を勤むるさま(出家の経緯)、かきくづし聞こえて(説明申し上げて)、この娘のありさま(その中で娘の生い立ちなどを)、問はず語りに聞こゆ(織り込んで御話し申しました)。をかしきものの(面白い話の中にも)、さすがにあはれと聞きたまふ節もあり(胸を打つ場面もありました)。*「月も入り方」が何時頃なのか判然としない。「四月になりぬ」で「澄める夜の月」なのだから、夕方には月が出ていたと考えて月齢10日くらいだとすれば、月の入りは真夜中の3:00前後になる。「いたく更け」てはいる。

「いと取り申しがたきことなれど(差し出がましい事を申すようですが)、わが君(光り輝く高貴なあなた様が)、かうおぼえなき世界に(このように思いがけなく当地に)、仮にても(一時的に

せよ)、移ろひおはしましたるは(移って御出でに為られましたのは)、もし(もしかすると)、年ごろ(この数年来)老法師の祈り申しはべる(この老いぼれ坊主が安泰を祈願する)神仏のあはれびおはしまして(神仏が私を憐れんで栄光を少し味あわせてやろうかと御考えに為って)、しばしのほど(暫くの間)、御心をも悩ましたてまつるにやとなむ(殿の御心を煩わせ申し上げる事になたのか)と思うたまふる(存じます)。

その故は(と申しますのも)、住吉の神を頼みはじめたてまつりて(住吉神を信奉し始めましてから)、この*十八年になりはべりぬ(今年で十八年になります)。女の童(めのわらは、娘が)いと きなうはべりしより(幼い時から)、思ふ心はべりて(思う所在りまして)、年ごとの春秋ごとに(毎年春と秋に)、かならずかの御社に(みやしろに)参ることなむはべる(参詣させる事にしております)。*注に<娘の出生と年齢に関する記事だが、「若紫」巻と「須磨」「明石」巻との間で、ややつじつまの合わない年齢記述。今、娘が十八歳ころとすると、「若紫」巻で九歳ころとなり、代々の国司が求婚したという良清の話と合わない。>とある。源氏は本年で27歳。若紫を北山で見初めた時は18歳だったから9年前。したがって明石入道の話が北山で良清から語られたのは、確かに9年前の事だった。そこで、娘が<生まれし時より>住吉詣出をしていたとすれば本年で18歳となって、注釈の通りに当時は9歳という事になる。となると、若紫よりも一つ年下となって、いかにも良清の話と合わない。しかし此処の記述に「幼きなう侍りしより御社に参る」とあって、住吉詣出は<生まれし時より>では無く、着袴(ちゃっこ)や七五三の祝言から始まったと考えれば、娘の歳を3~5歳多く見る事も出来そうに思う。また、注の「代々の国司が求婚した」事に付いては、<歴代の播磨守が求婚した>のではなくて<後任の各官位の役人が求婚した>という事で、そのうちの一人が良清だったという事だろうから、仮に娘が当時13歳だとすれば北山での良清の話との辻褄は合う。とすれば、娘は本年で22歳くらいの見当だが、それで生娘だとしても箱入りなのだから整合性はありそうだ。今後の記述で確認しよう。

昼夜の六時の勤めに(ひるよるのろくじのつとめに、また毎日の六回の念仏行で)、みづからの(わたくしは自分の)蓮の上の願ひをば(はちすのうへのねがひをば、極楽往生の願懸けなどは)、さるものにて(然て置いて)、ただこの人を(ただ娘に)高き本意(たかきほい、高貴な家柄との縁組という高い理想を)叶へたまへと(叶え下さるようと)、なむ念じはべる(ばかり御仏に念じて参りました)。「六時(ろくじ)」は<晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の勤行。>と注にある。凡そでは、晨朝(じんどう)は明け六つ(午前六時)、日中(にっちゅう)は正午。日没(にちもつ)は暮れ六つ(午後六時)、初夜(しよや)は戌亥の刻(午後九時)、中夜(ちゅうや)は子の刻(午前零時)、後夜(ごや)は丑寅(午前三時)、との事。

前の世の(さきのよの、前世での)契りつたなくてこそ(廻り合わせの悪さで)、かく口惜しき(この様な官位の低い)山賤と(やまがつと、田舎者と)なりはべりけめ(成り下がっては居りますが)、親、大臣の位を保ちたまへりき(親は大臣の位を守っていました)。みづからかく(わたくしは自分から望んで)田舎の民となりにてはべり(田舎暮らしをしているのです)。

次々(しかし子孫が次々と)、さのみ劣りまからば(こうして埋もれて行くとしたら)、何の身にかなりはべらむと(何処まで落ちぶれてしまうのかと)、悲しく思ひはべるを(悲観していましたので)、これは(この娘には)、生れし時より頼むところなむはべる(生まれた時から夢を託してきたのです)。

いかにして都の貴き人にたてまつらむと思ふ心(どうにかして中央の立派な家柄の人と縁組を整えたいとの思いが)、深きにより(強いので)、ほどほどにつけて(分相応の)、あまたの人の嫉みを負ひ(多くの人からの求婚を断り)、身のためからき目を見る折々も多くはべれど(身の程知らずと責められる事も何度も在りましたが)、さらに苦しみと思ひはべらず(一向に苦とは思いませんでした)。

命の限りは狭き衣にもはぐくみはべりなむ(命懸けで微力ながらも其の心算で娘を大事に育てて参りました)。かくながら見捨てはべりなば(其れが適わぬ内に親に死に別れるような事に為ったら)、波のなかにも交り失せね(入水して命を絶て)、となむ掎てはべる(というように娘にはきつく言い付けております)」など、すべてまねぶべくもあらぬことどもを(全てを書き尽くせないような混み入った事情まで)、うち泣きうち泣き聞こゆ(泣き泣き御話し申し上げました)。

君も(源氏も今回の天変と明石行について)、ものをさまざま思し続ける折からは(その意味を色々と考え合わせて居らした時なので)、うち涙ぐみつつ聞こしめす(感じ入りながら御聞きに為りました)。

「横さまの罪に当たりて(謀反などという無実の罪に問われて)、思ひかけぬ世界にただよふも(思ってもいなかった当地へ流れてきた事を)、何の罪にかとおぼつかなく思ひつる(どういう因果かと不思議に思っていたが)、今宵の御物語に聞き合はすれば(今の御話しと付き合せて見ると)、げに浅からぬ前の世の契りにこそはと(あなたが生母の従兄妹だという浅からぬ宿縁を知って)、あはれになむ(ああ、そういう事だったのかと気付きました)。

などかは(どうして)、かくさだかに(このようにはっきりと)思ひ知りたまひけることを(分かって御出でだった縁故を)、今までは告げたまはざりつらむ(今まで御話し下さらなかったのですか)。都離れし時より(都を離れた時から)、世の常なきもあぢきなう(人々の手のひらを返したような冷たい態度も味気なく)、行なひより他のことなくて月日を経るに(念仏行だけに明け暮れて)、心も皆くづほれにけり(すっかりいじけていました)。

かかる人ものしたまふとは(そのような御嬢様がいらっしゃる事は)、ほの聞きながら(少し耳にした事は在りますが)、いたづら人をば(私のような逸れ者などは)ゆゆしきものにこそ思ひ(厄介者と思って)捨てたまふらめと、思ひ屈しつるを(相手に為さらないだろうと思ひ挫けていたのを)、さらば導きたまふべきにこそあなれ(そのようにお導き下さるとは有難い事です)。心細き一人寝の慰めにも(ぜひ御嬢様をお引き合わせ下さい)」などのたまふを(などと光君が仰るのを)、限りなくうれしと思へり(入道はとても喜びました)。

「一人寝は君も知りぬやつれづれと、思ひ明かしの浦さびしさを (和歌 13-05)

「一人寝の辛さ身にしみて、夜を明かしの浦さびし (意識 13-05)

まして(あなた様や娘の空しさも報われるかもしれませんが、それにまして)年月思ひたまへわたるいぶせさを(わたくしが長年この良縁を待ち望んでいた苦節を)、推し量らせたまへ(お考え

下さい)」と聞こゆるけはひ(と申す入道は)、うちわななきたれど(身を震わす興奮ぶりでしたが)、さすがにゆゑなからず(大変な深謀遠慮でした)。

「されど(寂しいとは言っても)、浦なれたまへらむ人は(海辺の暮らしに慣れているあなた方とは違って、私は)」とて(と光君が)、

「旅衣うら悲しさに明かしかね、草の枕は夢も結ばず」(和歌 13-06)

「旅寝はいっそう寝付かれず、夢も結ばず夜を明かし」(和歌 13-06)

と、うち乱れたまへる御さまは(冗句を御返しになる御姿は)、いとぞ愛敬づき(まことに親しみがあって)、言ふよしなき御けはひなる(上機嫌でした)。数知らぬことども聞こえ尽くしたれど、うるさしや(この日は其れは多くの数え切れないほどの御話しがありませんでしたが、一度には書き切れませんので追々御話しします)。ひがことどもに書きなしたれば(入道を偏屈者であるかのような書き方をしたので)、いとど(いっそうに)、をこにかたくなしき(常識外れの頑固さという)入道の心ばへも(入道の信念は)、あらはれぬべかめり(お分かり頂けたかと存じます)。

[第七段 明石の娘へ懸想文]

思ふこと(願いが)、かつがつ叶ひぬる心地して(まずまず叶った気分)、涼しう思ひみたるに(入道が涼しい顔で事の成り行きを見て居ますと)、またの日の昼つ方(其の翌日の昼に)、岡辺に御文つかはす(源氏は岡辺の姫君に手紙を差し上げました)。心恥づかしきさまなめるも(姫が気恥づかしそうにしているのも)、なかなか、かかるものの隈にぞ(このような所に優れた人が隠れていたものだと)、思ひの外なることも(意外な驚きがあった事も)籠もるべかめると(伝わるように)、心づかひしたまひて(源氏は配慮なさって)、高麗の胡桃色の紙に(こまのくるみいろのかみに、上質の乳白色の胡桃色の紙に)、えならずひきつくろひて(丁寧にくるみ込んで)、

「遠近(をちこち)も知らぬ雲居に眺めわび、かすめし宿の梢をぞ訪ふ」(和歌 13-07)

「噂に聞いた高窓に、掛かる木末を揺らしたい」(意識 13-07)

『*思ふには(隠し切れない恋心です)』とばかりやありけむ(というくらいの事のように)。*注に<「思ふには忍ぶることぞ負けにける色には出でじと思ひしものを」(古今集恋一、五〇一、読人しらず)の第一句の語句を引き、真意をこめる。>とある。

入道も、人知れず(初めて通いを赦した男からの恋文を)待ちきこゆとて(お待ち申そうと)、かの家に来みたりけるも(岡辺の家に来ていたが)しるければ(其の来訪を知って)、御使いとまばゆきまで(使者が却って恐縮するほど)酔はず(ゑはず、持て成しました)。

御返り(しかし御返事が)、いと久し(遅すぎます)。内に入りてそそのかせど(入道が部屋に入って急かせましたが)、娘はさらに聞かず(娘は一向に書きません)。恥づかしげなる御文のさまに(立派過ぎるお手紙に)、さし出でむ手つきも(お返事を差し出そうと筆を取っても)、恥づかし

うつつまし(気後れして書き出せません)。人の御ほど(源氏の身分と)、わが身のほど思ふに(自分とを比べると)、こよなくて(別世界に思えて)、心地悪しとて寄り臥しぬ(気分が悪いと言って臥せてしまいました)。言ひわびて(言うに困って)、入道ぞ書く(入道が返事を書きました)。

「いとかしこきは(御手紙の偉大な畏れ多さは)、田舎びてはべる*袂に、つつみあまりぬるにや(田舎者には身に余る光栄とと思っているようで御座います)。さらに見たまへも(其の上にお目に掛かるなどと言うのは)、及びはべらぬかしこさになむ(思いも抛らない畏れ多さなので御座いましょう)。さるは(そうは申しましても)、 *注に<「うれしきを何に包まむ唐衣袂ゆたかに裁てと言はましを」(古今集雑上、八六五、読人しらず)を踏まえた表現。>とある。この引歌は既に以前にも引かれていたと思うが、<この晴れがましさを如何にして大事に抱えて行こうか、せめてこの服の袂をもっと大きく作って置けばよかった>ということだろうから、基本的にはくだけた口調の親しみがある歌、かと思う。其の親しみある間柄を強調している、という意図はあるのだろう。元々「つつむ」という言葉に<大事にする><気兼ねする>という意は込められるので、「袂」や「袖」のように身に着けたもので親しみを顕すのは常套とも言えるかも知れない。

眺むらむ同じ雲居を眺むるは、思ひも同じ思ひなるらむ (和歌 13-08)

遠く眺める雲居でも、いつか一緒に上りたい (意識 13-08)

*注に<入道の代筆歌。「眺む」「同じ」「思ひ」がそれぞれ二度づつ繰り返し使用。娘も源氏と同じ気持ちであることを強調。>とある。源氏の贈歌の「雲居」を受けていても、此方はだいぶ生々しく見える。「雲居」は雲のある空や其の場所で、源氏は岡辺を遠く憧れると言う気持ちを掛けたのだろう。しかし「思ひも同じ」の「雲居」は<宮中>に他ならない。是は、姫の代筆というよりは入道の思いではないのか。入道は娘にも中央志向の教育を叩き込んであるのだろうが、京の大臣家育ちの入道と明石の受領家育ちの姫とでは、やはり育ちは違うだろう。

となむ見たまふる(というように娘の気持ちを見ております)。いと好き好きしや(いやは、気取ってしまいました)」と聞こえたり(と書いたようです)。陸奥紙に(陸奥紙で)、いたう古めきたれど(とても古風ながら)、書きざまよしばみたり(字体は風流でした)。「げにも、好きたるかな(確かに気取っているな)」と、めざましう見たまふ(源氏は半ば呆れ気味でした)。御使に(入道からの使者には)、なべてならぬ(選りすぐりの)*玉裳(たまも、綺麗な衣裳)などかづけたり(などをもち帰らせなさいました)。 *注に<海辺の縁で、「玉裳」(玉藻)「被く」(潜く)という表現。>とある。取って付けた様で、海辺から岡辺への贈り物の場面で、どうしても作者が使いたかった言い回し、だろうか。

またの日(翌日に源氏は)、「*宣旨書きは、見知らずなむ(御大層な代筆とは意外でした)」とて(と前置きして)、 *「宣旨」は公文書なので書記が書く。書記は理屈で言えば広義の代筆かもしれないが、公文書の統一書式に則った規律であって、<代わりに書く>のではなく<間違いなく書く>役目である。源氏のような王家血筋のものが言え、ある程度は相手を持ち上げた表現になるのかもしれないが、基本的には大袈裟な戯れ言葉で、少なからず皮肉は込められているだろう。

「いぶせくも心にもものを悩むかな、やよやいかにと問ふ人もなみ (和歌 13-09)

「悩みは深まるばかりです、まだお返事も無いままで (意識 13-09)

*注に＜源氏の贈歌。「も」係助詞、強調。「かな」終助詞、詠嘆。「やよや」連語（「やよ」感動詞＋「や」間投助詞）。「無み」連語（「な」形容詞語幹＋「み」接尾語）無いのでの意。＞とある。この歌の味わいは「無み」という中途半端な終わり方にある、のだろうか。添え句にまで「言い難み」と重ねて、源氏の不満を強調したのかもしれない。「言い難み」を敢えて言えば＜なぞ問うてたまはらむや＞だろうか。要するに、返事の催促だ。

『*言ひがたみ(はつきりとは言えませんが)』 *注に＜和歌に添えた言葉。「恋しともまだ見ぬ人の言ひがたみ心にもものむつまじきかな」（『弄花抄ろうかしょう』所引、出典未詳）を引く。『集成』は「まだ見ぬあなたに恋しいとも言いかねまして」と注す。＞とある。「言い難み」は「恋しとも」を受けているので「まだ見ぬあなたに恋しいとも言いかねまして、思いが募るばかりです」とは引歌を言い換えられる。この引歌を下敷きにしているからこそ、理屈上では非難がましく見える贈歌でも、愛嬌のある気の利いた文面になっている、のだろう。

と、このたびは、いといたうなよびたる*薄様に(それはもうしなやかな薄紙に)、いとうつくしげに書きたまへり(とても美しい墨の色でお書きに為りました)。 *薄様(うすやう)は＜薄手の鳥の子紙・雁皮紙(がんびし)。また、一般に薄手の和紙。薄葉。(大辞泉)＞とある。「鳥の子紙(とりのこがみ)」は＜雁皮(がんび)を主原料とした上質の和紙。鶏卵の色に似た淡黄色で、強く耐久性があり、墨の映りもよい。福井県・兵庫県産のものが有名で、越前鳥の子・播磨紙(はりまがみ)ともいわれる。(同左)＞とある。いつから兵庫の名産なのか分からないが、播磨紙とは何とも所縁しい。また「雁皮」は＜ジンチョウゲ科の落葉低木。暖地に多い。高さ約1.5メートル。葉は卵形。夏、筒形の薄黄色の小花が集まって咲く。樹皮の繊維は紙の原料となる。《季花＝夏》(同左)＞とある。

若き人のめでざらむも(若い人で是に心を惹かれないとしたら)、いとあまり埋れいたからむ(其れは余りにも引込思案というものでしょう)。めでたしとは見れど(心は動かされても)、なずらひならぬ身のほどの(自分には身分不相応で)、いみじうかひなければ(とてもお相手は務まらないと考えて)、なかなか(寧ろ自分などを)、世にあるものと(一人前に認めて)、尋ね知りたまふにつけて(お声を掛けて下された事に)、涙ぐまれて(感激して)、さらに例の(ますます例によって)動なきを(どうなきを、応えようとしないのを)、せめて言はれて(入道に責め立てられて)、浅からず染めたる(深く香を焚き染ませた)紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして(墨を濃く薄く使いこなした字で、姫はこう返歌しました)、

「思ふらむ心のほどややよいかに、まだ見ぬ人の聞きか悩まむ」(和歌 13-10)

「お気持ちが良く分かりません、まだ知り合いもしないので」(意識 13-10)

*源氏の贈歌にそのまま応えた娘の返歌だが、初めての返答なので興味深い。源氏に「ややよいかにと問ふ人も無み」と返事を催促されたので、「思ふらむ心のほどややよいかに」と聞き返した。しかし、さすがにそれだけでは芸も無く失礼でもあるので、「訝せくも心にもものを悩むかな」という源氏が引歌で明かした胸の内を氣遣って「まだ見ぬ人の言ひがたみ」と言われても、それが「ややよいかに悩まむ」か分かりかねると答えて、しっかり手紙を受け止めた事は伝えた、という所だろうか。それに「まだ見ぬ人の聞き」なので「ややよいかにとは、＜会って確かめたい＞という気持ちを伝えている訳なので、源氏は娘の乗り気を受け止める事が出来ただろう。

手のさま(歌の文字)、書きたるさまなど(文面など)、やむごとなき人にいたう劣るまじう(京の貴族に然程は劣らない)、上衆めきたり(じゃうずめきたり、上流ぶりでした)。

京のことおぼえて(源氏は京の事を思い出して)、をかしと見たまへど(楽しくお感じになったが)、うちしきりて遣はさむも(余り頻繁に手紙を送るのも)、人目つつましければ(人目を憚るので)、二、三日隔てつつ(二、三日おきに)、つれづれなる夕暮れ(寂しげな夕暮れや)、もしは、ものあはれなる曙などやうに(物悲しい明け方などに)紛らはして(其の人恋しい風情に恋心を忍ばせて)、折々、同じ心に見知りぬべきほど推し量りて(姫も同じ気持ちで居る頃だろうと推し量って)、書き交はしたまふに(手紙を遣り取りなされると)、似げなからず(姫も其れに相応しい応対をしました)。

心深く思ひ上がりたるけしきも(教養があつて自尊心が高い姫の様子から)、見ではやまじと思すものから(源氏は会わずには居られない気持ちにお成りだったが)、良清が領じて(りゃうじて、姫の話をおが物顔で)言ひしけしきもめざましう(言っていた事も気掛かりで)、年ごろ心つけてあらむを(何年も思いを寄せていた娘を)、目の前に思ひ違へむも(目の前で横取るのも)いとほしう思しめぐらされて(気が進まないと思ひ巡らし為さつて)、

「人進み参らば(相手のほうから事を運んで来て呉れば)、さる方にてても(そういう事で仕方が無いと)、紛らはしてむ(誤魔化せるのだが)」と思せど(と御思いに為ったが)、女はた(をんなはた、其の相手の女の方は)、なかなか(どうしたものか)やむごとなき際の人よりも(京の貴族の女よりも)、いたう思ひ上がりて(よほど気位が高く)、ねたげにもてなしきこえたれば(奥ゆかしい応対に終始致したので)、心比べにてぞ過ぎける(根競べで日が経ちました)。

京のことを(京に残した妻の事を)、かく関隔たりては(こうして国境を越えて遠く離れては)、いよいよおぼつかなく思ひきこえたまひて(ますます気掛かりに源氏は御思いに為ったようで)、「いかにせまし(どうしたものか)。たはぶれにくくもあるかな(冗談ではすまない)。忍びてや(隠し事で)、迎へたてまつりてまし(呼び寄せ申してしまおうか)」と、思し弱る折々あれど(気弱に為る事も度々あつたが)、「さりとも(とはいへ)、かくてやは、年を重ねむと(こうした不遇でいつまでも居られないのだからと)、今さらに人悪ろきことをば(今さら人聞きの悪い事などは、慎まなければならない)」と、思し静めたり(思い直し為さつたのです)。

[第八段 都の天変地異]

その年、朝廷に物の訓し頻りて(おほやけにもものさとししきりて、祀り事に神仏のお告げが続いて)、もの騒がしきこと多かり(天変地異が幾つも起こりました)。*三月十三日(やよひのじふさんにち)、雷鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階のもとに(おまえのみはしのもとに、清涼殿の御座所正前の縁側に)立たせたまひて(お立ちあそばして)、御けしきいと悪しうて(御機嫌がたいそう御悪そうに)、にらみきこえさせたまふを(帝を睨み付け為さるのを)、かしこまりておはします(恐縮して控えていらっしゃいます)。聞こえさせたまふことも多かり(院の苦言は多かつたのです)。源氏の御事なりけむかし(源氏についての事だったのでしょう)。 *「三月十三日」は入道が天の啓示で源氏を迎えに行った日。

いと恐ろしう(帝はとても怖がり)、いとほしと思して(故院に申し訳ない気持ちに為つて)、後に聞こえさせたまひければ(大后に御話しなさいましたが)、「雨など降り、空乱れたる夜は、思

ひなしなることは(気に為っている事が)さぞはべる(悪い夢に成って現れるものです)。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと(滅多に騒ぎ立て為さいませぬよう)」と聞こえたまふ(と大后はお答えになります)。

にらみたまひしに(睨みなさった故院の霊と)、目見合はせたまふと見しけにや(目を見合わせ為さったからと見えて)、御目患ひたまひて(帝は目を患いなさって)、堪へがたう悩みたまふ(大変にお苦しみになりました)。御つつしみ(病氣平癒の祈禱を)、内裏にも宮にも限りなくせさせたまふ(大后は御所でも自邸でも何度も執り行わせました)。

太政大臣(おほきおとど、帝の後見の祖父大臣が)亡せたまひぬ(亡くなりました)。ことわりの(無理もない)御齡なれど(おんよはひなれど、御歳でしたが)、次々におのづから騒がしきことあるに(総理大臣の死去なれば政務もことごとく滞り朝廷は混乱して)、大宮もそこはかとなう患ひたまひて(大后も何処と無く体調を崩されて)、ほど経れば弱りたまふやうなる(次第に御弱りのよう)、内裏に思し嘆くこと、さまざまなり(帝の御嘆きは内憂外患と様々でした)。

「なほ(やはり私は)、この源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば(本当に無実の罪でこのように身を沈めて居るならば)、かならずこの報いありなむとなむおぼえはべる(必ず其の報いを受けると思います)。今は、なほもとの位をも賜ひてむ(また元の官位を与えようと思う)」とたびたび思しのたまふを(と帝は度々御考えに為り仰いましたが)、

「世のもどき(それでは世間への示しが)、軽々しきやうなるべし(付かないことでしょう)。罪に懼ちて(罪を恐れて)都を去りし人を、三年をだに過ぐさず(三年も経たない内に)許されむことは(許される事になっては)、世の人もいかが言ひ伝へはべらむ(皆が如何に言い伝える事でしょう)」など、后かたく諫めたまふに(大后が強く御諫め申しなされましたので)、思し憚るほどに(帝は決心が付きかね為さるままに)月日かさなりて、御悩みども(御二人の御病状は)、さまざまに(それぞれが)重りまさらせたまふ(重く御成りになりました)。